



焼け付くような日差しにみじんもひるまない。スタンドの雲田気をホームゲームにすべく、全身を使って発声する小原海月団員。

## 「ハッサーヨイー！」 （発声用意）」

「始めっー！」  
「フレイー!!」「フレイー!!」  
放課後、校舎に挟まれた中庭に響き渡るエールの掛け声。  
県内屈指の伝統を誇る浜松商業高校応援団の練習風景だ。月・水・金の週3日、団員たちが声を張る。

同校の応援団は長く生徒会活動（応援委員会）として位置付けられていたが、3年前に部活動となり、現在は1年生20人、2年生14人の計34人が所属。うち男子4人、女子30人、ほぼ9割を女子団員が占める。

浜商は6割以上が女子生徒。先々の代の応援団長は女子が務め、その凛々しい姿が注目を集めた。男子生徒の多くは所属する部が入学時にすでに決まっている。そのため部活を決めていない男子は貴重で、4月はチラシをまいて団員獲得に励むという。

### いつも誰かを応援中

活動は活発で、一年間を通じてほぼ毎月、どこかで何かを応援中だ。新年度に入るとまず「新入生歓迎会」。吹奏楽部がキラーチューン「VIVA浜商」をかけると体育館内は一気に盛り上がる。緊張気味に前の方に座っている新1年生は、すぐ後

そして夏本番を迎えると、全国高校野球選手権地方大会が始まる。言うまでもなく応援団の見せ場であり、野球部敗退とともに引退する3年生にとって、最後の晴れ舞台でもある。

今年初の戦の相手は湖西高校。浜松球場は朝9時の試合開始時点で気温30度を記録した。炎天下、応援団は吹奏楽部と共に応援の波状攻撃で味方を援護。マーチと応援個人技を次々に繰り出して相手校を威嚇した。しかしながら、試合結果は無念の敗退。試合後、「申し訳ありません」と謝る応援団長の姿が印象に残った。

### 応援はひたむきに。 周りの人のために

これを境に、3年生の鈴木雄大さんから2年生の平野晴也さんに応援団長が交替した。  
「応援って、自分たちが勝敗を決められない。選手に想いが届いているかどうかも分からない。でも、ふざけてるヤツに応援されても頑張ろうと思えないじゃないですか。だから応援は全力でなきゃいけないんです」（鈴木さん）

応援相手は同じ学校の生徒だけにとどまらない。地域からも応援の依頼が舞い込む。二学期が始まる直前には、浜商OBが入居する老人ホームで演舞を披露した。応援団は学校の代表として見られることが多く、

るで2・3年生が右へ左へと踊り始めるのでビックリだ。この時の壇上の応援団の演舞にシビれて入団を決意する新入生もいるという。

5月は部活動壮行会、6月は浜工浜商野球定期戦、さらに浜商OBOGまつりでの演舞と出番が続く。高等学校応援団フェスティバルもこの時期だ。

### 届け！ 応援の力



吹奏楽部と交替で中庭を使う。黄色のトレーナーは1年生の応援ユニフォーム。

応援団の本来の役目は脇役である。それは彼らの宿命と言っている。しかし、応援団が主役になる日がある。それが「高等学校応援団フェスティバル」。校歌、応援歌、大進撃、スパークリングマーチ、ダイナマイトマーチ、コンバットマーチ……。応援団が各校ならではの演舞を力一杯に披露する。順位付けのない発表の場が、拍手と歓声に包まれる。

街で知らない人から声を掛けられたり、お店でサービスされたりすることもあるという。これも地元ファンが多い浜商ならではの話だろう。

秋になれば浜商祭のシーズン。校中庭のメインイベントが応援団のステージであり、新団長の顔見せの場でもある。冬にかけても、地元商店街での盛り上げ演舞、サッカー部応援、浜松シティマラソン出張演舞



現在の浜商の応援スタイルは早稲田系。コーチをしてくれるOBの一人が早大応援部の元主将だからなのだ。

などなど、イベントは目白押しだ。「応援に行くというより、応援させていっていただくという感謝の気持ちです。『元気もらったよ』と言ってくれるとやっぱりうれしい。自分たちのためだけでなく、人のために頑張ることが応援なのかな」（鈴木さん）  
余談だが、部内恋愛はかなり盛んなのだとか。のどが強くなっているヒソヒソ話が苦手と笑うが、恋愛事情は案外オープンなようだ。

浜松商業高校  
第95代応援団長による  
スパークリング  
マーチ演舞



始

終